人間関係学研究　第20巻　2022　13-25

映画『風立ちぬ』における両価性に関する心理臨床学的一考察

石川佳奈[1]・福元理英[2]・垣内圭子[3]・川浦千明[4]・後藤秀爾[5]

A Consideration of Ambivalence in *"THE WIND RISES"*

Kana ISHIKAWA　Rie FUKUMOTO　Keiko KAITO　Chiaki KAWAURA　Shuji GOTO

Ⅰ．問題と目的

映画『風立ちぬ』は，第二次世界大戦時に海軍零式艦上戦闘機いわゆる“零戦”を設計した堀越二郎を主人公に，彼の夢と挫折，そして恋を描いた物語である。劇中には，関東大震災，世界恐慌，失業，貧困と結核，ファシズムと帝国主義，戦争がもたらす熱狂と死の気配が充満している。社会の潮流は抗いがたい強い力で同一の方向へ流れており，その流れに逆らって異を唱えることは非常に難しい時代であった。この抗いがたい同調圧力と死の気配という要素は，現代に生きる私たちと無関係なものではない。たとえば，劇中で描かれる関東大震災に代表される自然災害や突然の事故，事件，自分や身近な他者の病気，何かしらの挫折，失敗など，日常とは異なる“非常事態”は私たちの日常に潜在している。そのような非常事態に見舞われたとき，私たちはある特定の考えや行動傾向に縛られがちになってしまわないだろうか。また，同調圧力という点では，非常事態に限らず日本社会に特有の社会風土ともいえ，私たちは日々この圧力下で生活している。そして 2021 年 11 月時点での現在，私たちは新型コロナウイルス（以下，COVID-19 と略記）という未知のウイルスが蔓延する状況下でこれまでの日常を失い，バランスを崩しながら生活している。現代は本作で描かれているような戦争の時代ではないが，“感染予防”という抗いがたい同調圧力と感染症による死の気配の蔓延は，まさに本作で描かれる状況と酷似している。そのため，このような社会状況下を生きるクライエントが面接室に現れることをセラピストは十分心に留め，そしてセラピスト自身がこの潮流に巻き込まれないようバランスを維持し内省し続ける必要がある。そのためのヒントを，本作から得ることはできないだろうか。

本稿では，このような社会の中で生きる私たちの心のあり様を，映画『風立ちぬ』を題材に精神分析の視点から検討することを目的とする。主人公二郎とその周辺の人々の心の様相から，現代を生きる人間の心のあり様，つまり内的世界について検討したい。

なお，本稿で取り上げる映画『風立ちぬ』とは，「零戦を完成させた飛行機の設計技師・堀

[1] 心理学科　助教
[2] 日本福祉大学大学院　准教授
[3] 愛知医科大学病院　精神神経科　心理士
[4] 名古屋大学大学院教育発達科学研究科　博士後期課程
[5] 愛知淑徳大学　名誉教授

越二郎をベースに，同時代を生きた文学者・堀辰雄のエッセンスを取り込み」（二馬力，2013）制作され，2013 年 7 月 20 日に公開された宮崎駿監督作品を指す。

Ⅱ．物語を読み解く視点

映画『風立ちぬ』において特徴的なのは，対象に内包される様々な側面や要素の対立と矛盾について，登場人物たちが直面せず悩まないことである。対立し矛盾する要素は，劇中幾度も表現されるものの，それは常に自分とは異なる他者や，現実と切り離された夢想＝内的世界の中で語られるのみである。この問題を「矛盾」と明確に現実の言葉として発したのは，主人公二郎の友人である本庄だけであった。このように，対象に内包される矛盾した要素が劇中幾度となく表現され続ける一方，登場人物たちはそれを同一の対象に含まれるものとして抱えず排除している点が，この作品の大きな特徴となっている。

また，この問題と同様に顕著なのが，破壊性や攻撃性の問題である。劇中では，爆撃機としての飛行機や関東大震災とそれに続く火災と混乱，戦争の気配，結核という病と死など，至るところに自身を脅かす対象物が描かれている。これらの脅威は明確な力として描かれず，暗黙裡に漂う雰囲気や内的世界の情景としてしか表現されないため，登場人物たちがこれらを情緒として体験する様は描かれない。それはまるで，そのようなものは登場人物たちとは切り離された“外側”のもので，自分たちとは関係のないものであるとされているようである。このことにより，本作には淡々とした一種“綺麗ごと”という印象が付き纏う。

本稿では，このような矛盾と破壊性，攻撃性の問題を読み解く視点として，精神分析，特に対象関係論の視点を取り上げる。

対象関係論

Klein, M. は，Freud, S. の理論をもとに，主に子どものプレイの観察を通して，子どもが語る内容やその表現から，子どもたちが外的世界（external world），つまり現実に生きているのと同時に，同じようなリアリティをもつ内的世界（internal world）に生きているということを見出した。この内的世界は，人が生まれたそのときからすでに心の中に存在する世界であり，そこに自己（self）や対象群（objects）が存在しているとされる。Klein, M. は，この内的対象（群）の性質や自己との関係性と，その関係を自我がどのように体験しているのかという点に着目した。外的世界とは区別される内的世界が，三次元的空間をもつ体験の場として人の心の中に想定され，そこでの自己と内的対象の関係性のあり方やその性質，自己と対象との相互交渉のあり方が，その後の人生における個人の感じ方，考え方や振る舞いを規定していると考えたのである。このような内的世界の対象との関係性は，重要な他者である両親との生後早期の関係を基にして成り立っており，その人のその後の人生の対人関係のあり方を規定するという考え方のことを，対象関係論とよぶ。

また Klein, M. は，人の心は段階（stage）や時期（phase）のように他の状態との明確な区別によって発達していくものではなく，不安，本能衝動，防衛機制の様々な関連によって変動し，進展したり逆行したりを繰り返すと考え，これをポジション（position）とよんだ。このポジションは，生後 4 か月頃までの乳児の体験する心のあり方である「妄想・分裂ポジション（paranoid-schizoid position）」と生後 4 か月頃から 2 年頃までの間に乳幼児が体験し通過する「抑うつポジション（depressive position）」という心のあり方からなり，自我心理学的な段階

である「口愛期」にほぼ相当する。

1．妄想・分裂ポジション

生後まもなくの乳児は，その知覚能力の未熟さから，母親をひとりの人間として捉えることができない。そのため母親は，乳房や手，目など身体の各部位の断片として乳児に体験されることになり，これらが乳児の内的世界の最初の対象（object）となっていく。また，この乳児の世界は混沌としていて，その基底に Freud，S. が想定した“生の本能”と“死の本能”が働いており，内的世界は生の本能に基づく愛情やリビドー性の欲動と死の本能に基づく攻撃や破壊の欲動がせめぎ合う場となっている（松木，1996）。この内的世界の中で生の本能が優勢の場合，乳児は母親に充たされた経験をもとに満足を与えてくれる母親を“自分を満たしてくれるよい乳房の母親”と感じるようになる。しかしこのとき，攻撃や破壊の欲動である死の本能が優勢となれば，自己をまとめることができず断片化する不安を感じることになる。このとき，自分を満足させてくれない母親は“自分に欲求不満などの不快感情を与える悪い乳房の母親”というまとまりとなり，“よい母親”と“悪い母親”というそれぞれ別の存在に分裂する。その対象の分裂に対応するように，自分自身も“よい自己”と“悪い自己”の２つに分裂する。この“よい乳房”からおっぱいをもらい満たされる“よい自己”と，おっぱいを与えてくれず自分に欲求不満を体験させる“悪い乳房”に満たされない“悪い自己”がペアとなる。この分裂された対象関係を特徴とするのが妄想・分裂ポジションという心の在り方である。この時期に代表的な心的機制が，分裂と投影同一化である（Klein, 1946 ／ 1985）。

分裂（splitting）とは，早期の原始的防衛機制のひとつとして Klein, M. によって指摘されたもので，「対象や自我（自己）を複数に分けようとする心的機制」（中村，1992）のことである。すでに述べたように，乳児の世界はこの機制によって分裂しており，対象はまとまった全体として認識されない。この時期，よい対象（乳房）とよい自己のペアと悪い対象（乳房）と悪い自己のペアを比べたとき，後者の勢力が優勢となっている。そのため，乳児は悪い対象から攻撃される不安（迫害不安）を強めることになる。この悪い対象には悪い自己も連動しているため，乳児は“自分は悪い人間である”という自己イメージを強めていく。

投影同一化（projective identification）は，「自我（自己）の部分 parts を対象の中に into 押しやり，その対象の内容を引継ぎ take over，対象をコントロールしようという意図をもつもの」（中村，1992）で，この機制により乳児はさまざまな不安や衝動を悪い乳房のせいであるとし（投影），そのために攻撃を向けてくる（不安にさせる）内的な，そして外界の母親に自己の攻撃性を向けることになる。しかしこのことは，自身が攻撃した対象から報復されるという迫害不安を生じさせる。

このような機制により，乳児は自己の攻撃性を対象に投影するが，それによって対象から攻撃されると感じるようになり（迫害不安），よい対象はよい対象として過度に守られ理想化されることとなる。

2．抑うつポジション

その後，幼児の内的世界は，母親との交流や加齢に伴う自我機能の発達によって，新たなポジションへと進む。部分的対象がまとまりをもった全体対象として感じられる抑うつポジションである。幼児は，母親からの適切な世話によって心地よい状態を体験し，よい対象やよい自己への信頼感を高めていく。これによって，よい対象とよい自己は，かつて自身に苦痛をもた

らしていた悪い対象よりも優勢となり心の中核となっていく。このよい自己を中核とし，幼児の様々な機能や感覚を含む自己部分がつながりをもち，自己は恒常的な統合状態（全体自己）へ向かう。また，「部分対象群はひとつの全体対象へとまとまっていき，（中略）より現実的で安定した内的世界が築かれていく」（松木，1996）こととなる。

しかし，このように分裂していたよい対象と悪い対象が統合されることで，今まで攻撃してきた悪い対象が実は愛していたよい対象である母親と同一の存在であり，愛する対象を自分が攻撃し傷つけていたという事実を幼児が知ることにもなる。このときになり，幼児は2つに分裂していない自己のもつ攻撃性への悔い，罪悪感という抑うつ的な心の痛みを感じるようになる。そしてこのことにより，幼児は「よい対象がもういないのではなかろうかという寂しさ，孤独感，絶望感，よい対象への思い焦がれ，せつなさ，悲哀，哀悼」（松木，1996）を感じ，償いの思いが生じる。このように幼児が現実感覚を高めていく過程で，迫害されていると感じていた被害的な体験世界から，自己のもつ攻撃性への悔き，自責感，罪業感という抑うつ的な心性，不安が生じ，迫害不安は抑うつ不安へと姿を変えていく。この抑うつ不安を幼児が取り扱っていく心のあり様を，「抑うつポジション」とよぶ。この心のあり様では，分裂の機制は減少し，具体性をもつ過度な投影同一化と理想化は減弱する。そのため，幼児は対立する感情を分割し排除しなくとも，そのどちらも自分の身のうちに抱え感じることができるようになり，両価性（ambivalence）を体験することができるようになる。

Ⅲ．物語のあらすじ

映画『風立ちぬ』の物語を，対象関係論の視点を中心にまとめる。

1．二郎の夢と挫折

夢の中，少年二郎は飛行機を操縦し，早朝の美しい田園風景の中を飛行する。美しい風景，美しい自然の中を飛行する二郎は，まるで風と一体となったかのようである。しかし，突然雲間から不気味な飛行戦艦が現れる。二郎の操縦する飛行機は飛行戦艦に近づきすぎ，衝突し墜落してしまう。その瞬間，少年二郎は夢から目覚めた。

少年二郎は，飛行機の操縦士になるという夢を抱いていた。しかし，近眼のためにその夢は断念せざるを得ない。夢の挫折を自覚する中，飛行機雑誌でカプローニというイタリア人航空機設計家を知った日の晩，二郎は夜空に飛行機を夢想する。その後，場面は草原へと転換し，その夢の草原で，二郎はカプローニと出会う。ふたりは，戦争に向かう飛行機を見送り，そしてカプローニが「戦争が終わったら作る」という遊覧飛行機に乗り込む。美しい景色と巨大な飛行機を眺め，カプローニは近眼のために操縦士になるという夢を諦めざるを得ないと肩を落とす二郎に，飛行機は「戦争の道具でも，商売の手立てでもない」，「飛行機は美しい夢だ，設計家は夢に形を与えるのだ」と話し，「飛行機の設計士」という新たな夢を二郎に与えた。そして，夢から目覚めた二郎は，飛行機の設計家になり「美しい飛行機を作りたい」と母親に高らかに宣言する。

大学生となった二郎は，東京の大学で飛行機の設計を学ぶことになる。郷里から東京に戻る汽車の中で，二郎は菜穂子という少女と出会う。汽車のデッキで二郎が本を広げた途端，突然の風が吹き二郎の帽子が飛ばされてしまう。その帽子をキャッチした菜穂子は，二郎に「Le vent se lève」と語りかけ，二郎はそれに「il faut tenter de vivre」と返す。満足したように

笑う菜穂子が客車に戻った後，二郎はこの詩について「風が立つ，生きようと試みなければならない」とひとり呟く。汽車はのどかな風景を進んでいく。その直後，関東大震災が発生し，東京は火の海となる。火災による暴風，熱風が発生する中，神社の境内に多くの人が避難し不安そうに身を寄せ合っている。二郎と菜穂子は，そんな避難所を抜け出し手を取り合って混乱する東京を駆け抜ける。そして，無事菜穂子を自宅に送り届けた後，二郎は震災で混乱する大学に戻っていく。大学に戻った二郎は，消火作業をしながらカプローニが作った巨大な飛行機を夢想するが，その飛行機は自重に耐え切れず真っ二つに割け墜落する。その夢の中から，カプローニは火災に立ち向かう二郎に「生きねばならん」と語りかける。

数年後，飛行機会社への就職が決まった二郎は，会社のある名古屋へと向かう。大学時代をともに過ごした友人の本庄も同じ会社へ就職している。就職早々，二郎は隼の取り付け金具の数値計算を任され没頭する。飛行機が墜落する場面を夢想した二郎は，組み立て途中の実際の隼を見て「おもしろい，飛行機はおもしろいな」と熱中する。しかし，同席した飛行試験において，二郎は空中分解する隼を目の当たりにすることになる。残骸となった隼を上司の黒川と見つめながら，二郎はドイツ留学に推薦されたことを伝えられる。その夜，本庄は二郎に，“貧乏な国”である日本だからこそユンカース社へ莫大な支払いをし自分たちが飛行機を作れるのだと現実の矛盾を語る。さらに，本腰を据えて仕事をするために結婚するのだと，自分自身の矛盾をも指摘する。ドイツの地で二郎は，本庄らとともにユンカース社の爆撃機を見学し，技術の差を目の当たりにする。その夜，二郎は雪原に日の丸をつけた爆撃機が墜落する夢をみた。

ドイツから移動する汽車の中，二郎はカプローニと夢の中で再会する。カプローニは，二郎に「まだ風は吹いているかね」と尋ねる。そして「吹いている」と答えた二郎を自身の引退飛行に招待する。寒々しい風景から，場面は太陽の陽気に溢れる草原に転換する。カプローニは，自身が設計した爆撃機に自身の家族やスタッフの家族を招き，賑やかで笑顔に溢れた引退飛行を行うという。飛行機の翼状でカプローニは二郎に「空を飛びたいという人類の夢は，呪われた夢でもある」と説き，飛行機が殺戮と破壊の道具でもあるという宿命を告げる。これに二郎は，「僕は“美しい飛行機”を作りたい」と答える。そんな二郎にカプローニは，「創造的人生の持ち時間は10年だ。君の10年を力を尽くして生きなさい」と諭すように語りかける。

しかし，ドイツ留学から帰国後，二郎は海軍昭和7年試艦上戦闘機の設計チーフを任されるも，この飛行機は試験飛行で墜落してしまう。

2．菜穂子との再会と恋，そして死の気配

二郎は，自身の心の傷を癒すために軽井沢のホテルで静養することになる。その地で，二郎は青々とした草原で風に吹かれながら力強く絵筆を握り，瑞々しい女性となった菜穂子と再会する。ふたりが震災を思い出す中，雨上がりの草原に虹がかかる。その虹を見て，菜穂子は「生きているって素敵ですね」と二郎に語りかける。一方，ホテルでの二郎とドイツ人カストルプとの語らいの中では，戦争に突き進む日本の破滅が予言される。

軽井沢滞在中の二人の幾度かの交流，菜穂子の高熱による体調不良による一時の別離を経て，二郎は菜穂子に交際を申し込む。すると菜穂子は，2年前に母が結核で亡くなり，自身もまた同じ病魔に侵されていると伝える。しかし，二郎はそれでも菜穂子との交際を希望し，ふたりは恋人となる。

療養先である軽井沢から名古屋へ戻った二郎は，復職するものの特別高等警察に追われ，一時的に上司である黒川の家の離れで生活することになる。そこに，婚約した菜穂子が喀血した

という知らせが届く。居ても立っても居られない二郎は，汽車の中で涙を零しながら仕事をし，菜穂子が暮らす東京の家に駆けつける。菜穂子は「二郎さんと一緒に生きたいの」と，遠く離れた高原病院での治療を決意する。二郎は東京に駆けつけたその晩，すぐさま名古屋に戻り，新たな戦闘機（零戦）の開発に向け，終業後も自主的に勉強会を開くなどひたむきに仕事に取り組む。

菜穂子は，ひとり高原病院のベッドで毛布に包まり，孤独な療養生活に耐える。しかし，二郎の手紙をきっかけに，菜穂子は病院を抜け出し名古屋の二郎のもとへ向かう。再会した二郎と菜穂子は，その再会を喜ぶ。ふたりは黒川夫妻を説得し，その協力のもと結婚式を挙げ，黒川邸の離れで一緒に生活しはじめる。

3．菜穂子との別れと夢の終わり

離れでのふたりだけの生活の中，菜穂子の身体は徐々に衰弱していく。床に臥せることが多くなった菜穂子を離れに残し，二郎は零戦開発に邁進する。そのような中，黒川邸に医師となった妹の加代が訪れ，菜穂子の病状を話し，その心境を思い涙する。そんな加代を菜穂子は，「キラキラして未来がいっぱい詰まったお日様みたいな人」と表現する。二郎の仕事は病臥する菜穂子の傍らでも続き，そんな二郎を菜穂子は愛しそうに見つめる。春，ついに二郎が取り組んでいた飛行機が完成し，二郎は試験飛行の立ち合いのため黒川邸を離れなければならなくなる。この日，菜穂子は気分がよいため散歩に出かけると黒川の妻に言づける。その後，黒川邸に加代が到着するが，菜穂子はひとり高原病院に戻るために黒川邸を出奔していた。その頃，二郎の設計した飛行機は過去最高の速度を記録し，人々は歓喜する。一方，二郎は心ここにあらずの状態で，人々の歓喜の声を背に遠く山の方角を見つめていた。

鈍色の空の中，戦闘機が飛んでいく。戦火の風景の後，墜落した戦闘機の残骸が埋め尽くす草原を二郎は歩いている。陰鬱な情景の広がるそこは，二郎がカプローニと初めて出会った夢の草原である。その草原で，二郎はカプローニと再会した。カプローニは，この場を「我々の夢の王国」と表現するが，二郎は「地獄か」と思ったという。その二郎に，カプローニは「ちょっと違うが同じようなものだ」と話し，「（この 10 年）力を尽くしたか？」と尋ねる。その問いを二郎は肯定するが，「終わりはズタズタであった」とも語る。青々とした夢の草原を二郎の設計した零戦が舞う様子を，カプローニは美しく，そして良い仕事だと指摘する。それに対して二郎は，零戦が一機も戻ってこなかったと続ける。カプローニは「飛行機は美しくも呪われた夢」であり，大空は「みな呑み込んでしまう」と話す。その後，カプローニの導きにより二郎は菜穂子と再会する。菜穂子は，二郎に「生きて」と繰り返し伝え，風になり消えていく。そんな菜穂子に，二郎は繰り返し「ありがとう」と感謝し涙する。残された二郎にカプローニは「君は生きねばならん」と伝え，ふたりは夢の続きを語ろうと歩き始めた。

Ⅳ．考察

1．物語の分析

(1) 分裂排除される破壊性

二郎は，少年期から飛行機に心酔し，その設計士になることを志していた。成長後はこの夢を実現させ，“美しい飛行機”を作りたいと切望し仕事に邁進する。そして遂に，零戦を完成させた。劇中，二郎が打ち込む飛行機は，「美しい夢」，「人類の夢」である一方，「呪われた夢」

であり「殺戮と破壊の道具」としての宿命を背負った存在であるとカプローニから繰り返し指摘され続ける。しかし，現実の二郎はその側面には一切目を向けず，“美しい飛行機”の開発に没頭する。このとき，飛行機のもつ破壊的な側面はその対象から分裂排除され，“美しさ”という価値のみが強調されている。さらに，この“美しさ”には一見二郎の熱狂が託されているようにもみえるが，そこに納得のいく明確な理由の描写は付随しておらず，“美しい飛行機を作る”という以上のものを感じ取ることができない。“美しい飛行機を作る”という二郎の姿勢は，まとまったひとり，もしくはひとつの対象としての体験世界から切り離されているようにみえる。

このように，（内的）対象の内包する要素をよい対象と悪い対象に分裂させる心の状態は，まさに妄想･分裂ポジションの心のあり様といえる（木部, 2019）。また Segal（1992 ／ 2007）は，妄想・分裂ポジションの世界においては，迫害的世界と理想的世界が分かたれた結果，「非常に理想化された対象世界が無意識裏に潜在している」と述べている。つまり，飛行機のもつ“美しさ”という価値のみを追求する二郎の姿勢は，自らのもつ破壊性，攻撃性を分裂排除し，飛行機のよい側面のみを理想化した妄想・分裂ポジション的な心のあり様と考えられる。

では，分裂排除されている二郎の破壊性，攻撃性とは何なのだろうか。劇中では，飛行機の破壊的な側面だけでなく死の気配も強く否認されている。本作は，大正から昭和初期を舞台としており，当時の日本は関東大震災，世界恐慌，失業，貧困と結核，ファシズムと帝国主義，戦争という圧倒的な破壊の力にさらされていた。しかし一方で，大正モダンに代表されるモダニズムと享楽主義という生のエネルギーに充ちた時代でもある。社会には死（破壊）の気配が潜在し続けていたが，同時に生のエネルギーにも溢れ，生と死（破壊）のエネルギーの双方を抱え込んでいた。しかし，その後「日本帝国が破滅にむかってつき進み，ついに崩壊する過程」（二馬力，2013）の中で徐々に死の気配は分裂排除され否認されるようになっていく。このような時代背景の中，劇中の二郎も飛行機＝戦闘機，爆撃機が象徴する自らの破壊性，攻撃性を分裂排除する。この破壊性，攻撃性とは，まさに“死”の象徴といえるのではないだろうか。そして，当時“死の病”であった結核患者である菜穂子もまた，“死”の象徴である。自らの内にある破壊性，攻撃性を抱えられず分裂排除した二郎にとって，死の体現である菜穂子に惹かれるのは必然といえる。劇中，社会が戦争につき進み破壊性が増していくのと呼応し，菜穂子の病状も悪化し死に近づいていく。しかし，この抗いがたい状況を，二郎も菜穂子も情緒的に体験しない。代わりに，黒川夫妻の妻や妹である加代によって体験される。そして，二郎自身は“美しい飛行機”の開発に邁進していく。

この視点に立てば，飛行機（零戦）や菜穂子とは，二郎自身の象徴だといえる。自身の中にある“飛行機”という夢を創造する生の本能と，一方でその力が他者を傷つけ破壊するものであるという死の本能の両価性を抱えきれず，分裂排除したものが自己の破壊性，攻撃性であり，妄想・分裂ポジションの世界に残されたものが“美しい飛行機”であり“菜穂子”であるといえるのではないだろうか。

(2) 情緒性の非現実化

このように，劇中では二郎自身が抱えられず分裂排除した破壊性，攻撃性が幾度となく描かれる。分裂排除された破壊性，攻撃性は，投影同一化の機制により自分以外の対象に投げ込まれ，対象自身を投げ込まれたものを体現する存在に変えてしまう。それは，劇中の関東大震災やそれに伴う火災と混乱，飛行機（航空機）を代表とする軍需産業の隆盛，戦争，そして病として

表現され，その圧倒的な力に飲み込まれる（迫害される）。さらに，二郎によって分裂排除された彼の破壊性，攻撃性は，飛行機や菜穂子として体現され，そして理想化される。飛行機は“美しさ”という価値が強調され，また菜穂子は病身であるにも関わらず夫の仕事を支える“儚なく美しい妻”として描かれる。この描写は，菜穂子の病状が進むにつれ，より顕著になっていく。軽井沢のホテルで出会った生命力を感じさせる躍動的な菜穂子は，いつしか病臥し死を待つ存在へと変化していった。ここで強調される菜穂子の“美”は，黒川邸での結婚式の場面に象徴される“幽玄な美”であり，死という破滅の要素を内包する“美”である。病臥し死にゆく妻の枕元で仕事に没頭する夫と，その夫を見つめる妻というふたりは，この“死”という現実に悩まず，悲しまず，怒らない。そこには生々しい人間の情緒が伴っておらず，リアリティは喪失している。

北川（2007）は，カウンセリングを止めたいと望むものの，同時に止めたくないという両価的なふたつの情緒に耐え切れないスキゾイド患者との心理療法から，彼らが強い対人希求性をもつ反面，対人関係の中で情緒を体験することは自分自身を見失うことであり，相手を破壊してしまうものであること，そのためにスキゾイド患者は人間らしい生々しい情緒を切り離し体験しないあり方を選択していると指摘している。つまり，スキゾイドの特徴をもつ者は，情緒を自己から遠ざけ距離を取ることで自我を防衛しているのである。二郎（と菜穂子）の人間的な生々しい情緒を分裂排除し，他者との関係に開かれず自己内で完結するあり方は，まさにスキゾイド的なあり方であるといえるのではないだろうか。そしてこのようなあり方は，妄想・分裂ポジション的なあり方でもある。この心のあり方においては，両価的な現実，価値観，情緒は，まとまりをもったひとつとして心の中に抱えることが難しくなってしまう。そのために，これらは自己の外へ排出されるほかなくなる。

(3) 夢の両価性

二郎自身である飛行機は，物語の最終盤において過去最高速度を記録する。少年期から没頭してきた夢の結実であるが，二郎の心はそこに向かず，開発仲間である他者と喜びの情緒を共有しない。自己のみで完結する心のあり方がここでも繰り返されるが，その後場面は転換し，零戦の戦闘場面，そして破壊された飛行機の残骸が積み重なる草原へと展開する。この夢の草原でのカプローニとの対話を通して，二郎ははじめて自分の追求した“美しい飛行機”の夢が「地獄のような」側面をもち，また敗戦によって潰されていったことを認めるに至る。そして，「生きて」と願う菜穂子と別れ，涙する。

劇中では，二郎の分裂排除された破壊性，攻撃性について，内的世界においてはカプローニが，現実世界においては友人の本庄やドイツ人カストルプが言及し続ける。これらの存在もまた，投影された二郎自身の一部である。特にカプローニは，二郎の妄想・分裂ポジション的世界において授乳してくれる（援助してくれる）“よい乳房”＝“よい自己”でもある。それは劇中の夢の草原が，カプローニの夢であり二郎の夢でもあるというお互いの言葉に現れている。さらに，カプローニは二郎を導く父的存在でもあるといえるだろう。劇中二郎は，自分自身であり父でもあるカプローニとの対話を通して，自身が分裂排除した破壊性，攻撃性に向き合い続ける。この行為は，抱えられなかった生と死という両価的な自己と対象を見つめ，抱えるために必要な過程であったといえるだろう。自身の抱えられない破壊性，攻撃性は，物語冒頭から飛行戦艦とそれに近づきすぎて墜落する飛行機という形で提示され続ける。それは少年期の夢からはじまり，ドイツ留学中の夢想の中でも飛行機の墜落として登場する。自身の抱える破

壊性，攻撃性は破滅的なものであり，それを自身のものであると認識することは自己の破滅を意味していた。しかし，この破滅的な破壊性は，カプローニとの幾度もの対話によって安全なものとして提示され，徐々に見つめられ，抱えることのできるものへと変化していく。そして最後には，自身の破壊性，攻撃性の象徴である零戦の墜落を認め，父的存在であるカプローニの導きで“理想化された母”である菜穂子と別れることができたのである。そして，菜穂子は二郎の内的世界の中に溶けてゆき，分裂排除していた破壊性，攻撃性は，菜穂子との別れ（対象喪失）という形で統合された。その結果，二郎は悲哀の情緒を体験し，死を内包した“生”という両価性を保持し生きていくために歩き始める。

(4) 妄想・分裂ポジション的あり方から抑うつポジション的あり方へ

生来，人はそのうちに両価性を備えている。しかし，両価的な思考や情緒は，ときに同時に抱えることがひどく辛く苦しいものとなってしまう。二郎の夢の追求は，劇中の社会状況では兵器開発の夢であり，その先に戦争と死を強烈に連想させるものである。また，社会全体が戦争に向かう圧倒的な流れの中で，その現実のはらむ破壊性，攻撃性について目を向け葛藤することは，その社会で生きることを難しくさせる可能性の高いものでもある。そのような中で二郎が生きるためには，飛行機が戦争兵器であるという側面を分裂排除し，“美しさ”のみに目を向け仕事に打ち込むほかなかったのではないだろうか。矛盾を抱えるために零戦作りに没頭するしかなかった二郎は，妄想・分裂ポジションの心のあり方を生きていたといえるだろう。しかし，カプローニとの対話を通して対象喪失の悲哀を体験し，抱えることのできなかった矛盾，両価性に向き合うために歩き始めたところで物語は幕を閉じる。カプローニに導かれた菜穂子との別れによって，二郎は妄想・分裂ポジション的心のあり方を通過し，抑うつポジション的心のあり方のとば口に立ったと考えることができる。

しかし，抑うつポジション的な心のあり方とは，両価的な思考や情緒などの自己の要素を「自己の内部にそれらの葛藤を抱えることによって解決」（Segal, 1992 ／ 2007）する心のあり方のことであり，これを松木（1996）は「葛藤を葛藤として心に持っておくことができること」と端的に言い表している。二郎は，菜穂子との別れに涙し悲哀の情緒を体験したが，対立する矛盾に悩み，葛藤する姿は劇中で描かれなかった。敗戦による夢の墜落（自己実現の失敗）とそれによる対象喪失の傷つき，零戦開発の功罪と償いなど，二郎がこれから取り組まなければならない課題は多い。これらにどう向き合っていくかという課題は持ち越された形となった。しかし，本作のタイトルでもある『風立ちぬ』の詩は，「風が立つ，生きようと試みなければならない」と死を身近に感じながらも生きようとする姿勢を表現している。それが本作の伝えたかったテーマではないだろうか。そう考えれば，これからの二郎は悩み苦しみながらも懸命に生きていくことだろう。

2. 臨床場面での対象理解への示唆

(1) 揺れ動く心性の理解

私たちは，本作で描かれる戦争という未曽有の大惨事以外でも，たとえば仕事や学業での失敗，対人関係上の不安など日常的な出来事の中でも心のバランスを崩してしまう。Klein, M. が想定したポジションとは，順序通りに一方向に流れ，通過してしまえば戻ることがないものではない。「生涯を通じて，分裂妄想的機制とその幻想は生きており，ある種のストレス下では作動しがち」（Segal, 1992 ／ 2007）なものであるため，何らかの出来事により心のバラ

ンスを崩してしまえばネガティブで被害的・迫害的なものの見方，感じ方に陥ってしまう可能性が高くなる。もしかしたら，COVID-19 の流行下で生きる私たちも妄想・分裂ポジション的な心のあり様が優勢になってしまっている可能性があるといえないだろうか。COVID-19 という圧倒的な脅威に抗う有効な術を持たず，真偽の不確かな情報に左右され振り回される状況で，妄想的ともいえる情報が拡散されたり，それに没頭することで他の情報をシャットアウトし，自身の考えと相容れぬ考えを必要以上に排斥し攻撃する事態がニュースで取り上げられることもある。これらはまさに，妄想・分裂ポジション的なあり方であるといえる。社会に死の気配が蔓延し，迫害不安が強調された状況で人は容易にこのようなあり方に立ち戻ってしまう。このような状態は，日常に生きる私たちに普遍的に存在する可能性でもある。COVID-19 がもたらした状況は，このような可能性が顕著に顕在化したものであるだろう。

面接場面においては，クライエントがもともと持っている心のあり様の主な性質をアセスメントすることが必要になる。その際，クライエントを取り巻く環境や状況を考慮することが肝要であるが，前述したように私たちはその置かれた状況によって妄想・分裂ポジション的な心のあり様と抑うつポジション的な心のあり様を揺れ動いてしまう。そのため，両価性を抱えられず引き裂かれることになってしまったクライエントをアセスメントするとき，その背景に迫害的な社会状況があることをセラピストは十分念頭に置くことが重要になるだろう。妄想的で被害的なクライエントの訴えも，クライエント自身にとっては得体の知れない不安に対処する必死の術であり，抑うつポジション的な心のあり様との間で傷つき揺れ動くことを余儀なくされた結果なのかもしれない。この視点を私たちセラピストは忘れてはならない。

(2) スキゾイド傾向のあるクライエントの理解と介入

すでに述べたように，本作の主人公二郎の心のあり様は人間的な生々しい情緒を分裂排除し，他者との関係に開かれず自己内で完結するスキゾイド的なあり様であった（ここでいうスキゾイドとは，その人格の基底に分裂的要因をもち，そのために情動体験が断片化されており，妄想的・分裂ポジションの心のあり様を呈している状態で，Fairbairn, W. R. D.（1952 ／ 1992）が一連の研究から概念化したものを指す）。二郎は，診断としてのスキゾイド・パーソナリティ障害というよりは，あのような時代背景の中で心的な課題として両価性の問題を抱え，生き残るためにスキゾイド的なあり様を採用するしかなかったと推測できる。しかし，結果的に情緒性を遠ざけるあり方はスキゾイド・パーソナリティ的なメカニズムと同じであることを考えると，情緒を体験できないスキゾイド的なクライエントとの関わりのヒントを本作から得ることができるのではないだろうか。

劇中では，二郎が自身の一部でもあるカプローニとの対話を通して，分裂排除していた自身の両価性を見つめ，そしてその結果として破壊性，攻撃性を引き受け，菜穂子と別れることによって抑うつポジションのあり方へ到達した。このことは，クライエント（二郎）とその鏡でもあるセラピスト（カプローニ）との対話とも言い換えられよう。この対話の過程の中で，セラピストであるカプローニは二郎（クライエント）から分裂排除された部分に言及し続けた。これは，分裂機制の優勢なクライエントとの面接においては，クライエントから分裂されている側の対象関係を扱い解釈することが重要であるという指摘（祖父江，2015）と合致する。また，そのために白波瀬（2001）は，寺本（2001）の引きこもりを呈したスキゾイド患者との治療過程を取り上げ，セラピストがクライエントの投影してきた微妙な情緒を注意深く感知し，それについてセラピスト自身が懸命に思考し続けることの重要性を指摘している。さらに寺本

（2001）は，このようなセラピストの姿勢をクライエントが取り入れることで，クライエントが自身と重要な他者との関係を対象化し，言語化できるようになった過程にも言及している。このクライエントから分裂排除された情緒をセラピストが引き受け，それを見つめ思考し続けることによって，クライエントがセラピストを取り込み変化していくという様相は，まさに二郎とカプローニの対話そのものである。このように，セラピストが自身の情緒，つまり心的体験を通してクライエントの両価的な情緒を理解し受け止め，クライエントが抱えられる安全なものとして伝え返すやりとりが，スキゾイド傾向を有するクライエントとの関係において重要であると森（2018）は指摘している。

このようなスキゾイド傾向を有するクライエントへの介入方法を具体的に提示したアプローチに，「マスターソン・アプローチ」（Masterson & Lieberman, 2000 ／ 2007）がある。マスターソン・アプローチとは，パーソナリティ障害を全体的な対象関係をもつことができない「自己の障害」と捉えた Masterson & Lieberman（2000 ／ 2007）によってまとめられた，その理解と鑑別診断，治療技法に関する一連のパッケージである。マスターソン・アプローチでは，クライエントの話や，面接の中や外での行動，生活歴を注意深く聴くことを通して，またクライエントの転移や行動化のあり方やセラピストがもつ逆転移的感情や反応を通してクライエントの精神内界構造と対象関係を理解し介入することで，クライエントが自身の情緒を体験しはじめるとしている。この点は，白波瀬（2001）や森（2001）の考えと同様であろう。このアプローチでは，パーソナリティ障害を境界性，自己愛性，スキゾイドと分類し区別しているが，共通する治療上の視点として（1）転移，（2）転移性行動化，（3）見捨てられ抑うつ，（4）分析的中立性，（5）治療的姿勢，（6）治療の枠組み，（7）自己活性化と自己の障害の 3 連鎖を挙げている。そのうえで，マスターソン・アプローチでは，スキゾイドと診断する際に少なくとも「内向性」,「ひきこもり」,「感情の喪失」の 3 つの特徴が必須であると指摘している。「内向性」とは，その人が強く内的世界にとらわれている状況であり，「ひきこもり」はそれゆえの外の世界への無関心のことである。そして最後に「感情の喪失」とは，感情がないと感じる状態のことで，一見人とつながりがあるように見えるときでも感情は断ち切られており，そのような状態にスキゾイド者自身も「自分に感情があるのかどうか」と疑ったりする状態である。これらの特徴を押さえたうえで，その後の介入においては，スキゾイド的ジレンマを理解し，その理解をクライエントに伝えることが重要になる。スキゾイド者のジレンマとは，北川（2007）も指摘するように，強く人（対象）に関わりたいと思う反面，対人関係の中で情緒を体験することは自分自身を見失うことであり，相手を破壊してしまうものであるが，人（他者）と遠くなりすぎると完全に孤立してしまう苦痛や不安が生じるというものである。このようなスキゾイド者のもつ両価性についての不安をセラピストが理解，言及し，分裂排除している両価性の問題をクライエントと共に認めることで，クライエントはセラピストが安全な状況を提供してくれると理解し，危険が軽減されたと感じることができるのである。このような合意形成が，クライエントが自身のスキゾイド不安をおさえ管理する能力を高め，精神内界や対人関係で直面するプレッシャーの中でも適応を高めていくことに寄与する。しかしこのとき，クライエントが安全だと感じられるために，セラピストは断定的でない言い方をして，クライエントが拒絶できる余地をもつ単なる可能性として理解を提示する必要がある。このような関わりを続ける中で，クライエントは本来の自己のもつ何らかの側面について自覚し，自己活性化に開かれていく道筋ができるのである。

Ⅴ．おわりに

本稿では，映画『風立ちぬ』を題材に，抗いがたい同調圧力下で生きる人々やそのような状況の中，両価性に引き裂かれた人々の心のあり様，このような状況下での臨床実践について検討を行った。現在流行するCOVID-19は，世界的規模の未曽有の災害であり，この迫害的な状況において人々は他者との繋がりを喪失し，分断を余儀なくされている。この状況は，他者との繋がりだけでなく，COVID-19を恐怖し過剰に感染を心配する人々と感染を軽視し出歩く人々という形で社会の分断をも招いた。ただ，このような状況は特異的なものではなく，私たちの日常の中に潜在する心のバランスを失いやすい状況のひとつにすぎない。このような状況に巻き込まれ振り回されず客観的な対応をするためには，二郎のように自分自身と対話し内省し，セラピストとして生き残ることが必要となるだろう。本稿の検討が，そのための一助となれば幸いである。

また，本稿では映画『風立ちぬ』を対象関係論の視点から検討したが，本作には，本稿では十分に検討されていない父母との関係を巡るエディプス葛藤の問題や自己実現の課題など，様々な要素が潜在している。このような多様で多面的，複層的な要素を内包する本作は，セラピストが臨床実践の場で出会うクライエントそのものであるといえる。表面的に提示される問題行動や症状のみに目を向けるのではなく，クライエントが内包する様々な要素を心に留め，安易に決めつけることなく，目の前のクライエントに対峙していく姿勢とそのクライエントの可能性，創造性に目を向ける姿勢が，臨床実践の場で重要なセラピストの姿勢となるだろう。

付記

本稿において，様々なご意見と視点を提示していただきました臨床事例に学ぶ会の皆様に厚く御礼申し上げます。

文献

Fairbairn, W. R. D.（1952）. *Psychoanalytic Study of the Personalities.* Tavistock, London. 山口泰司（訳）（1992）. 人格の精神分析学的研究．文化書房博文社.

木部則雄（2019）．こころの発達と精神分析　現代藝術・社会を読み解く．金剛出版，pp.116-123.

北川清一郎（2007）．情緒に触れることへの不安―スキゾイド患者の心理療法―．精神分析研究，51（4），420-426.

Klein, M.（1946）. *Notes on some schizoid mechanism.* WMK 3. 狩野力八郎・渡辺明子・相田信男（訳）（1985）. 分裂的機制の覚書．メラニークライン著作集4 妄想的・分鉄的世界．誠信書房，pp.3-32.

松木邦弘（1996）．対象関係論を学ぶ　クライン派精神分析入門．岩崎学術出版，pp.36-44.

Masterson, J. F. & Lieberman, A. R.（2000）. *A Therapist's Guide to the Personality Disorders: The Masterson Approach.* Zeig Tucker & Theisen Inc. Phenix AZ. 神谷栄治・市田勝（監訳）（2007）．パーソナリティ障害治療ガイド 「自己」の成長を支えるアプローチ．金剛出版.

森　一也（2018）．精神病的混乱とその情緒に触れることをめぐって．心理臨床学研究，36（3），287-298.

中村俊哉（1992）．2-2　分裂（分割，スプリッティング）．2-4　投影同一化（投影同一視）．氏原寛・亀口憲治・成田義弘・東山紘久・山中康裕（編）．心理臨床大事典．培風館，pp.1055-1057.

二馬　力（2013）．プロダクションノート．『風立ちぬ』公式サイト，https://www.ghibli.jp/kazetachinu/prono.html（2021年11月22日取得）

Segal, J.（1992）. *Melanie Klein.* SAGA Publications. 祖父江典人（訳）（2007）．メラニー・クライン－その生涯と精神分析臨床．誠信書房，pp.32, 44, 55.

白波瀬丈一郎（2001）．圧力の下で思考すること，その治療的意義．精神分析研究，45（4），433-434.
祖父江典人（2015）．対象関係論に学ぶ心理療法入門―こころを使った日常臨床のために．誠信書房，pp. 32-33.
寺本勝哉（2001）．引きこもりを呈したスキゾイド傾向の強い自己愛パーソナリティ障害の男性症例．精神分析研究，45（4），426-432.